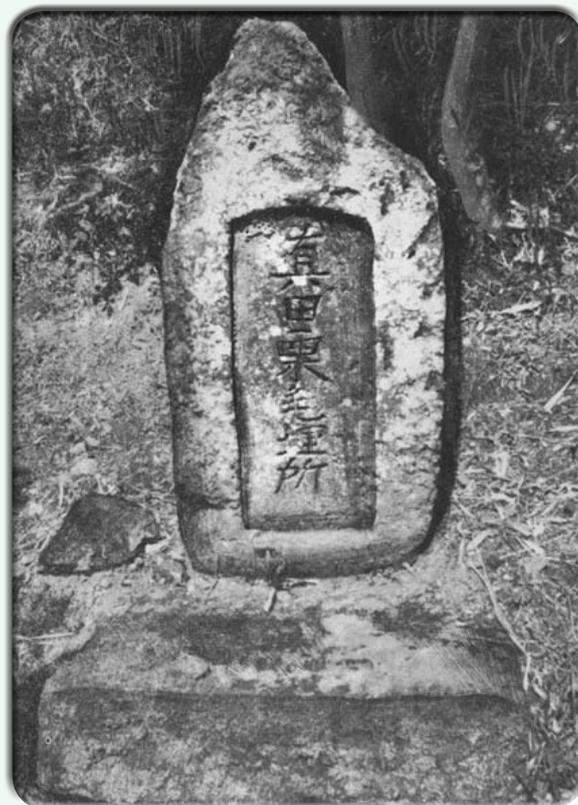


渡辺克己著



第二十四章●滝尾かいわい①



碓島のやぶ中に埋もれた一泊公愛馬の墓

滝尾の肥えかたげ

大分郡滝尾村が大分市に合併したのは昭和十四年。まだ歴史は浅い。シナ事変が、そろそろ泥沼的な様相を呈しはじめたころだ。東大分、八幡、滝尾の三村がいっしょに合併に持ち込まれた。滝尾の一般的な空気は合併には反対だったようだ。反対の理由の最大なものは滝尾は模範農村の全国表彰を受けたことがあるほど豊かな農村だ。自力でりっぱにゆけるものを、何も町かたと合併する必要はない、という自負心だ。

この自負心を裏返すと、農村の排他性や、町かたにたいするコンプレックスもひそんでいたようだ。市役所に何かの手続きに行っても、役人の態度は、町かたの者と農民とではまるで違う。あんなところにお世話になるのはごめんだ。だいいち遠いところを幾度も足をはこばされてはたまらない。そういうささいなことまでが、ガンコな感情となって一般の心を支配していたのだった。

しかし大勢には勝てなかった。いやな縁組みというものはいつまでも尾を引くもので、つい近年まで「大分市に合併して、どれほどの利益が滝尾にもたらされたか。まるで忘れられた地帯じゃないか」という不平が、何かことがあればつぶやかれていた。

滝尾が模範農村といわれるのにも農民の心の中では問題があった。それは農村一般の問題でもある小作人の犠牲の上に築いた地主の豊かさということだった。滝尾の農民の勤勉と努力の上に安座している一握りの地主が模範農村の表彰を受けたよ

うなものだというのである。田一反歩の収穫がふつう六、七俵。そのうちから小作米を四、五俵とられ、ほかに肥料代まで支払ったら、年取り飯に白米をたいて食べられるのがせいじっぱいというありさまだった。

それにしても滝尾の人はよく働いた。「滝尾の肥えかたげ」といえば有名だった。おもに下郡、羽田のお百姓さんだが、肥えたごをかたげて大分まで一日六回往復できなければ一人前といわれなかった。お百姓さんは、それぞれ大分の町の家々と肥えくみの契約を結んでおいて定期にくみに行くのだ。その家の家族の多少によって違いはあるが、だいたい年末にモチ米五升を、お百姓さんの方からお礼に持って行った。そのお礼用の米として、年の暮れには農家一戸平均八斗を用意したという。最も勤勉な農家は一石八斗を用意したそうだ。それほどたくさんのお肥えをくんだのだ。

お百姓さんは、肥えの濃淡を一目で見分けた。なめてみたという話があるが、あれはウソだ。大分の町の家々と肥えくみを契約するとき、中には家族数を実際より多くいって、お礼米を余計にもらおうなんて、さもし根性の者がいた。そんな家では、きたない話だが使つぽに水を流しこんで文字どおり肥えの水増しをすることがあった。それでは困るので、肥えの濃淡を一目で見分ける才覚が、おのずからついたのである。

昔は、お礼の米を持参させて肥えをくませてやった。いまは、くみ取り料を払っても、なかなかくみにきてくれない。世の中も変わったものだ。

臭い話に落ちて恐縮。

津守の婦人

滝尾は米作のほかにも、七島イ栽培も盛んだった。

大分川の川床の変化で、七島イ栽培に適した湿地が多かったし、刈り取った七島イ（藺）を乾燥させるに便利な、広い川原がいくらでもあった。

下郡、羽田あたりの大分川堤防の東側は、かつては川の本流であったらしく、堤防ができる前ごろまで、頭もしりもない堀のようなものが長く横たわっていて、これを「古川」と土地の人は呼んでいた。この「古川」に沿って湿地帯が広がっていたもので、明治の末ごろまでは、その湿地帯が深くてあぶないので、女の人などは、そのくろを通って田に行くとき、男に手をとってもらっていた。



七島藺わき（挿絵：田中 昇）

大友時代の古地図には、府内の東を流れる川が二本ある。その東側の一本が、この湿地帯の前身であったのかもしれない。

この流れが移動して七島イ栽培ができるようになってから、土地を農民に分配したものらしく、地名は「中新地」と呼んでおり、他には見られない一畝平均の細かな区切りになっていたそ

うである。

七島イを織るのは、おもに婦人の仕事だ。南大分かいわいでもそうだったが各家の納屋に手織りのゴザ機（ばた）があつて、シーズンには昼も夜も単調な機織る音がひびいていた。冬の夜はこどもは早く寝せてもらえなかつた。ヨナベにゴザを織るかたわらで、イロリに火をくべなければならなかつたからだ。このゴザ機の手織りは、滝尾の中でも津守がとくに盛んであつたとみえ、こんなことばがあつた。

「津守のおなごは、右手にコテ、左手にユウサシを持って生まれまされた」

コテもユウサシも、ゴザを織るさいに必要な小道具だ。

津守の婦人には、もう一つダンゴ汁という得意な技術がある。滝尾のダンゴ汁は有名だが、中でも津守のダンゴ汁は自慢であつた。政府の大官が津守をおとずれると、たいていダンゴ汁をごちそうしたものだそうで、ある知事が、津守のダンゴ汁に舌つづみをうって帰り、しばらくして、こう言つてきた。

「ダンゴ汁のうまさ忘れられないので、家の者に作らせてみたが、どうもうまくない。なにかコツがあるのか」

津守の人は、すかさず答えた。

「津守のおなごは、一生のうちにダンゴを大阪まで伸ばすのですからな」

これには知事も二の句がつけなかつた。

ダンゴは小麦粉一升をだいたい三十六にちぎり、一つを三尺に伸ばす。つまり一升の粉を百八尺に伸ばす計算だ。それをほとんど毎日作つて家族に食べさせているのだから、一生のうち

には百数十里、まさに大阪に届くほどのダンゴを伸ばしているかんじようとなる。すなわちダンゴ汁のうまさは、津守の婦人の経験が作りだす味だといったわけだ。

ハネツルべから井路へ

明治大分水路——植田から、滝尾、東大分、別保に至るまで、大分川東岸の水田をうるおしているこの水路は、配水を受ける農村に大革命をもたらせたものだった。

完成したのは明治三十二年、農民は過重な労働から解放され、干害の不安もなくなった。同時に小地主は水路構築費の負担に耐えかねて、土地を失う者が続出した。

明治水路ができるまでは、タメ池とハネツルべが田に水を送る唯一の手段だった。これでは少し日照りが続けば水不足の不安におびえなければならなかったし、少なくとも四、五年に一度は大干ばつで収穫を放棄しなければならなかった。

滝尾一帯もハネツルべが林立していた。

「朝は四時前に起こされて、水をくむ親の手伝いをさせられたものだった」

津守の老人がつかつた思い出を話してくれた。

ハネツルべの端につけた綱を親がツルべを引き上げるのに呼吸を合わせて引くのである。こうすればツルべを上げる手がずいぶん楽になる。

ハネツルべに付いているオケは一斗二升入りだ。これでだいたい四百杯くまないと一反の田に水をたたえることができない

い。こどもは眠い目をこすりこすり、ときにはベソをかきながら綱を引いた。

ハネツルベを四百回上下させるのは、容易なわざではない。それに一度くみこんでおけば、当分放っておいてもよいというわけにはいかない。どんどん地中にしみ込んでゆくし、蒸発も激しい。だから、朝くんで、午後もう一度くまねばならなかった。これを長い夏中、毎日くりかえすのだから、聞いただけでも気が遠くなる。

大分川の西側―元町、南大分一帯は初瀬井路のおかげで水の苦労はまったくないのに、川ひとつへだてたこちら側は地獄の重労働だ。「水路がほしい」という願いが地主、小作を問わず父祖代々叫びつづけられたのもむりもない。

だから、水路が完成して、水がそうそうと流れてきたときの喜びは、体験したものでなければわからない。

一応の完成をみて初の通水をしたときのことだ。「水がきた、きた」の声に、水路に駆け集まった村の人々は、手を振り上げ、足でひょうしをとおり、まるで踊りでもおどっているようなかつこうで、水先についていった。ところが、下郡のはずれまできたとき、ハタと水が止まってしまった。

「どげえしたんじゃ」とわいわい騒いでいるところへ知らせがきた。植田の横瀬のあたりで、水路の土手がくずれたというのだ。みんながっかりしてへたりこんだ。

いまのように、コンクリートで固めた水路ではない。それに水路の本線三十三キロ余の大事事だ。崩壊や故障が続出して、当事者の苦労はひととおりのものではなかったのである。

明治水路略史

水路を開きたいという農民の切望が藩政時代に実現できなかったのは、水路沿線の村々の管轄が複雑に入り組んでいるからだった。

まず水の取り入れ口である谷村（現挾間町）が肥後領、植田が臼杵領と延岡領、東植田が延岡領と天領（幕府直轄地）滝尾が延岡領と府内領、東大分が府内領、日岡が天領、桃園が延岡領、別保が臼杵領、松岡が天領といったあんばいだ。これではまとまりようがない。

だから明治維新になると、直ちに日岡、松岡の人が代表して日田県別府支庁長山県小参事に出席して許可をえている。天領はすべて日田県の管轄にはいっただからだ。

ところが明治四年に日田県が廃止になったので振り出しに戻り、同九年に大分県知事香川真一に安藤幸平（松岡）宇野新和（日岡）の代表名で出願したのが不許可。

ところが明治十三年にこの一帯が大干ばつに見舞われた。かわききった稲田の中をやってきた桃園の清水弥七さんが、悲痛な顔で羽田の戸長秋月範蔵さんの門をたたいたのがその年の八月。

「こんなことでは百姓は死んでしまう。もう一度水路のことを出願しよう」

弥七さんの熱意に動かされて、もともと水路の主唱者であった範蔵さんは、直ちに二人で大分郡長を訪問して出願の話をつけた。これが発火点となって各村が結束し、実測までこぎつけ

た。明治十七年ごろ内務省土木局長だった島惟精が桃園出身であったため、実測についていろいろ便宜をはかってくれたらしい。

こうして水利組合を組織し、ようやく幹線工事に着手したのが明治三十年一月。

ところで日清戦争の直後で、物価がうなぎのぼり。工事費が実測したさいの数倍にはね上がったために、請け負い者が工事を投げ出すやら、こぶんどもがアイクチをふところにして、工事費の値上げを迫るなど、水利組合の担当者は血みどろ苦痛をなめた。

おまけに、明治時代の未熟な工事ではせっかく掘り上げた水路が崩壊して、幾度もやり直すことがしばしば。さらに工事負担金の増額に耐えかねて脱退する村もあり、ついには、この平坦な所に水路を作っても水がくるはずないというデマも飛んで、水利組合管理者であった大分郡長の小倉左文さんは、ついに辞職して大阪に去るなどの困難が続出した。

一方、小地主は、過重な負担金を背負いきれず、ぞくぞくと土地を手放し、大地主に肩がわりをしていった。

明治大分水路は、こうしてでき上がったのであった。明治三十二年五月、下郡のかわらで完工式を行なった。

明治水路完成に、もつとも大きな功労のあったのは、牧虎太郎（羽田）清水弥七（桃園）大津太四郎（別保）安藤黄楊三（津守）宮崎又七郎（日岡）江藤豊蔵（別保）三浦藤蔵（日岡）などの人々だった。

この工事で人夫八人が事故死、三人が不具者となっている。

水路の観光を記念する碑は、東大分の護国神社下の丘上、田園地帯を見下ろす位置に立っている。明治四十二年の建立で、裏面には物集高見の明治水路をたたえた文と歌が刻んである。
ながれての世々につたへんそこつるの このかはのせにた
たふいさおし 物集高見

肥後どん道

肥後の藩主が参勤交代で江戸に上るさいは、肥後から豊後へ九州を横断して、鶴崎の大野川尻に臨んだ自領からの船を出すコースをとっていた。

この九州横断の長い道中が、肥後道といわれるものだ。

この道中には谷村（現挾間町）や野津原などの肥後領もあるが、ほとんどは、岡領、延

岡領、府内領、天領など他の領地を通らねばならない。しかしいくら相手が小藩でも他領を通るときは、遠慮があつたとみえ、なるべく領内の中心を避けている。

府内領の場合でも、野津原から木ノ上に出て、あれから雄城の台の東を光吉へのコースをとって、府内の



広瀬橋付近

城下町にはいる道を避けている。光吉から滝尾にはいつて、ここでわずかに府内領内を通り、東大分から、延岡領の桃園を抜けて鶴崎の自領にはいつたのだった。

滝尾には、その道路がいまもきれいなが、わずかに残っていて、「肥後どん道」または「肥後道」と古者は呼んでいる。あれがその道だと、はつきり示されるのは広瀬橋付近と、下郡の工業団地造成地の西側付近に、農道と化している雑草におわれた小道ぐらいのものだ。羽田と片島との境には「肥後どん橋」と呼ぶ石橋もあったそうだが、いまはない。これらをたどってみると、やはり村の中心を避けて、大分川沿いに下っている。そして下郡の北のはずれの六本松で、ほっとひと休みをして鶴崎に向かったのだ。

この六本松は、いまは土地の呼び名として、かろうじて記憶されているだけだが、明治時代までは巨大な松が並み木として残り、茶店もあった。明治時代、この茶店のヒウチ焼きという焼きモチは名物だった。ここは肥後道の宿場とまではいえないにしても、道中の人々の休憩所的存在だったようで、藩政時代には数軒の家が並んでいたという。中央通りに明治時代から大正初年ごろまであった三階建てのうなぎ料理店「三ヶ月」は、この六本松にあった茶店が移っていったのだそうだと、下郡の老人が話していた。

おもしろいことに、この「肥後道」と呼ばれる道が、滝尾にはもう一本あった。それは光吉から曲にはいつた肥後道が、富岡の方に行かず、曲の奥の芳河原というところを通って、山沿いに下郡に抜けているもので、現在はウサギ道といわれるほど

の、めったに人も通らない細道となっている。

津守に配流となった松平忠直卿が、参勤交代で通りかかる肥後の殿さまをつかまえて金品をねだるので、これをきらって津守を通らないようにしたのが芳河原の肥後道だといひ伝えられている。

これは忠直卿にとつては迷惑な伝説だ。いくら落ちぶれたとはいへ「御賄料」として五千石の捨てぶちを受けている。これで、別に将士を養う必要はなかったのだから、ゆうゆうと生活できたはずだ。別道を作ったのは、忠直卿配流の近くを通行するのをはばかって、その存命中、津守を避けたのが実情だろう。これに似た伝説がもう一つある。津守の肥後道の近くに「佐土金」という地名があるが、ここは佐土原の金を運搬して通りかかると、忠直卿がつかまえて横取りするので、そう呼んだというのだ。

忠直卿もついに、つじ強盗にされてしまった。申しわけない。

忠直卿配流

松平忠直卿が越前から豊後の萩原に流されたのが元和九年（一六二三年）。ここに六年ばかりいて、寛永六年（一六二九年）津守に居館を移し、死亡するまで二十数年間を津守の土に親しんだ。（寛永三年津守移館説もある）

萩原から津守に移された事情は、萩原居館が海に近く、しかも周囲の堀は海に通じているという地勢だから、忠直卿がむほん気を起こして逃げ出そうと思えば、たやすく逃げだせる心配

がある。そこでそんな危険もなく、府内藩士や幕府派遣の監検使が、守護監視しやすい津守にお移り願ったというのが実情らしい。そのほか参勤交代で海路東上する府内藩主などの乗船が直接見えるところに忠直卿の居館があることをはばかったことや、台風などのさい波風が居館に直接たたきつけるのは気の毒だという同情などもあったのだろう。

ところが、民間に伝えられている伝説では、暴君忠直卿の面目躍如たるものがある。

鶴崎には肥後藩と岡藩の船着き場があるし、乙津には延岡藩の港もある。このような港に出入りする各藩の運送船が沖合いを通るのを見つけては、直ちに船を出して積み荷をかすめ取った。また愛しよう（妾）お蘭の方が残虐を好む悪女で、生首を食せんに供えてないと飯がおいしくないというほどだった。それで忠直卿はお蘭の方のきげんをとるために付近の住民をやたらに殺した。こんな悪行に住民は困り果て、どうかして他村に移らせようと「萩原千軒、牧万軒、津守積つて数知らず」ということばを流布し、民家も多くて繁栄している津守に移館をすすめたので、忠直も大いに心を動かしてそれに従ったというのである。

越前では参勤交代の制にも従わず、酒色にふけり、家臣を惨殺するなど狂気の行状があつて豊後配流となつたのだが、配流のさたには従順にしたがい、配流後は人が変わったようにおとなしくなつたようだから、これらの伝説は越前における行状が伝わって民間に流布されたのだろうと史家はいつている。

しかし配流になつたときが二十九歳の若さだ。越前七十五万

石の大大名が、一挙に配流の身となったのだから、胸のうちは決しておだやかでなかったであろうし、若い血はわび住まいの寂しさに耐えられなかっただろう。ときには、むしゃくしゃした気分をまざらすために、いたずらをやらかしたかもしれない。世間知らずの若い殿さまの、ちよつとしたいたずらと思つてやったことも、住民にとっては大迷惑なことだ。その迷惑が口碑として伝えられる。火のないところに煙はたたない。越前での行状が伝わったとばかりはいいきれない。

忠直の悪名

忠直卿は、萩原から津守に移つてからは、庄屋を縁近く呼び寄せて親しく話したり、神仏を信仰したりの神妙な生活に入り、住民の評判もよかった。萩原では悪名を流し、津守では仁君の名をあげているのは皮肉な対照だと史家はいつている。

しかし、前に書いたように、肥後の殿さまに金品をねだつたり、運搬中の金を取り上げたり、津守における民間伝承は、やはり悪名だ。しかも、お蘭さまの悪女ぶりは、萩原だけの伝説かと思つたら、津守かいわいにもあつた。津守の周辺は明治ごろまでは竹ヤブをめぐらし、ヤブに沿つて泥沼が横たわつていた。この竹ヤブと泥沼は、外部からの火災を防ぐのに大いに役立っていたということだ。一伯公伝記に、忠直居館は四方大堀とあるから、あるいはその跡だったのかもしれない。それはさておき、この泥沼に悪女お蘭さまの話がまつわっているのだ。

お蘭さまは人間の生首を見るのが好きだった。（これは萩原

の伝説と同じだ）それで津守かいわいの農家の婦人は大恐慌をきたし、お蘭さまの目からのがれるのに腐心した。もしもお蘭さまの外出に行き会おうようなことがあったら、泥沼に逃げこんで、顔を泥につっこむことにしていた。泥だらけのよごれた顔は、お蘭さまが好まないから、難をのがれることができた。だから泥沼はお蘭さまよけにできたものだというのである。この話は、明治時代まで年寄りが、こどもたちに話し聞かせていたということだが、この話をきいて、終戦直後の満州、北朝鮮の日本婦人のことを思い出した。

ソ連兵が日本婦人を手当たりしだいに慰みものにするので、婦人たちは頭を丸め、顔に泥やなべ墨をぬって難をのがれようとしたのである。婦人にとって最も大切な顔をきたなくよごして、理不尽な災難から身を守ろうとするいじらしい心根は、いまでも昔も変わらない。

とにかく、暴君忠直卿への恐怖心は、津守まで持ち越されて、このような、さまざまの伝説となつて残されたのである。

ところで、忠直卿の暴虐な行状は、忠直の父秀康が梅毒で死亡しているのです、その遺伝で精神が狂ったという説があるが、それよりも徳川家の宿命の遺伝たる「躁鬱（そううつ）病」の発作中の乱行と見る。と久留米大学医学部精神神経科教室の王丸勇教授が最近の著書「英雄の医学考」で述べている。

「躁鬱病」は周期的に感情の変調、こう（亢）進をきたす一種の精神病だ。萩原でときどきその発作が起こったので津守に移したのだろうというのである。そうだとすれば、津守でもときどき発病しているわけだ。

弁天の水を飲ませたい

忠直卿の居館跡は現在滝尾農協長の二宮義雄さんの宅地となっていて、その道路に面した一角に史跡の標石が立っている。この居館跡地は「御屋敷」という字（あざ）名、また付近にそれに関連した字名が残っている。

御屋敷をめぐって、府内藩派遣の監視役人の詰め所や、出納係りなどの諸役人や足軽などの居宅があったという。

忠直卿が津守に移されたさい、藩命で、曲の庄屋を、津守の庄屋に転じさせたという。有能な庄屋を配したのだろう。曲の方では庄屋がいなくなったので、新たに庄屋を任じて置いた。ところが忠直卿が死亡したあと、津守に転じていた庄屋が曲に帰ってきたので庄屋が二人になった。そこで処置に困って曲を二つに割って宰領させた。これを元曲、今曲といい、いまも庄屋の子孫の家を元曲（大津留家）今曲（首藤家）と呼んでいるそうだ。

津守付近には、殿さまの使用に適するような良い水がなかったとみえ、下郡の山の手にある西光寺裏山にわき出る清水を御用水としていたという。

この清水は、近郷の名水といわれ、日照りが続いてもかれることがなかった。わき水の周囲は石でたたんで小池とし、池中に弁天さまをまつてあった。それで村人は「弁天の水」と呼んでいた。忠直卿の御用水となつてからは、ここに水屋を建て、カギをかけて一般の使用を禁止し、人足が毎日、津守のおやかたまで運んだという。忠直卿はこれでお茶をたてたので、「一

泊公のお茶の水」または「御前水」ともいい伝えている。小池をたたんだ石の一つには「葵の紋」を刻んであったと伝えられているが、いまはそんなものは見当たらない。のちに、大給公の御用水となったこともあるそうだから、明治ごろまでは、下郡かいわいの人々には、やはり「名水」へのあこがれがあったとみえ、病人の臨終には「弁天の水を一口飲ませてやりたい」といつていたそうだ。

この西光寺は、日羅開基と伝えられる古い寺だったが、島津軍が攻めこんだ天正の兵乱で焼かれ、小院を建てて再興したものの。忠直卿はこの寺を信仰し、しょう（妾）腹の子松千代が病気のさい、観音堂を再建して寄進している。その観音堂は安政の地震で倒れていまはないが、建立のさい、上野円寿寺の寛佐法師に書いてもらって上げた「上棟の銘」は、いまも寺に残っている。

忠直卿の墓は、前にも記したように西大分の浄土寺にあるが、もう一つは滝尾の碓島にある。この碓島の墓は、もと居館跡にあったもので、明治九年に忠直卿の子孫が二十人ほどの家来をつれて遺骨の発掘にきたことがある。このときはまだ延岡藩の役人が管理をしていたそうで、村の者たちに「刃物でも棒きれでもなんでもいいから持って集まれ」と命じ、発掘する人々を威かくしたという。もしも墓から遺品でも出たら渡さないつもりだそうだが、何も出なかったそうさ。

碓島には忠直卿の愛馬「真田くりげの墓」もある。大阪城の戦いで真田幸村の首級をあげたさい分取った幸村の馬だったそうで、滝尾の背後の長田山にあったのを碓島に移したのである。



オオイトデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公

開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたく願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「大分今昔」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！

デジタルブック版「大分今昔」 第二十四章 ●滝尾かいわい①

2008年1月25日初版発行

筆者 渡辺 克己

挿絵 田中 昇（着色：佐藤 克治）

編集 大分合同新聞社

制作 川村正敏／別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN 事務局

〒870-8605 大分市府内町3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内

© 大分合同新聞社

著者略歴◇渡辺克己
大分県大分市佐賀関町木佐上出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、学芸部等の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退職。昭和二十七年から同四十二年まで大分市教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。
郷土史を研究し「大分今昔」「豊後のまがい物散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」「豊後の武将と合戦」「ふるさとの野の仏たち」等の著書。